



羽合小学校 学校通信

平成27年2月20日 NO.100

「稚心を去れ」

先日、6年生が北溟中学校の入学説明会に出かけました。その時、北溟中学校の鳥山校長先生が6年生に贈られた言葉が「稚心を去れ」という言葉でした。

私は、学校通信No. 53「公と私」にこのように書きました。

赤ちゃんは好きなときに眠り、好きなときに起き、お腹がすいたときに泣き、好きなときにおしっこをしてお母さんやお父さんの都合を考えることはありません。「100%わたし」の時間を過ごしていきます。少し大きくなると「無敵のわたし」になっていきます。よくこどもたちが戦隊もののドラマをまねして遊んでいます。「ぼくは「〇〇レッド」だー!」となりきって遊んでいる時期のこどもたちは、不死身で空も飛べるし何でもかなう「無敵のわたし」なのです。

もう少し大きくなるとだんだん自分を客観的に捉えられるようになります。実は空を飛ぶことはできないと言うことが分かってきたりします。自分を見つめることができるようになります。また、まわりを見つめることも始まります。・・・

「稚心を去れ」という稚心はまさに「100%わたし」「無敵のわたし」なのです。

鳥山校長先生には、好きな時に好きなようにして、何でもできる、許されるという自分中心の考えを捨て去り、自分を客観的に見つめ、今、何をしなければならないかを考えることができるようにならなければいけないと教えていただいたのだと思います。

「無敵のわたし」の時代には、「今」と「自分」だけが存在します。稚心を去って「自分をみつめるわたし」に成長すると「過去と今と未来」と「自分と社会」が存在するようになります。

今の自分から過去をみつめ課題を発見する。未来をみつめ今の自分がどうすべきかを考える。「稚心を去る」ことは、進路決定に向かう中学生にはどうしても必要なことなのです。

しかし、「稚心を去る」ために何か特別なことをしなければならないわけではありません。「今やるべきことをやる」ことだけです。仲間を大切にすること、宿題をていねいにする、ルールや約束を守ることなど、当たり前のことをあたりまえにやりきることが、過去を生かし未来を創るのです。

「だるい」「たいがい」「めんどくさい」「なんでせないけん」「さそわれたから」「言えなかった」すべて稚心から出る言葉です。卒業という節目を迎える6年生に贈られた「稚心を去れ」という言葉に、6年生のみんなはしっかり応えてくれることと思います。

【10万冊もすぐそこに】 今年の学校図書館の貸し出し冊数が現在91000冊になりました。このペースでいくと3月には99000冊、開校以来、最高の貸し出し冊数になりそうです。10万冊にも手が届くかもしれません。

羽合小学校 寺谷英則